

二〇二五年度

一般入試Ⅰ 入学試験問題

国語（五十分）（全十五ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはっきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。



東京純心女子高等学校

□ 一の 次各文の――線を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 痛みを緩和するため薬を服用する。
- (2) 家を出る前に施錠する。
- (3) 彼は暫定的にその役割を引き受けた。
- (4) 公園は市民の憩いの場だ。
- (5) 土壇場で話がひっくりかえる。

□ 二の 次各文の――線を付けたカタカナの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 新しく従業員をコヨウする。
- (2) このプロジェクトにはトクシユな技術が必要だ。
- (3) 話し合いがオンビンに進む。
- (4) ムボウな計画は大きなリスクがつきものだ。
- (5) 雑踏の中にマギれて、友人を見失ってしまった。

□ 三の 次の文章は、「僕」と「彼」が話している場面である。《人物紹介》を参照しながら、あとの各問に答えよ。

《人物紹介》

僕――水墨画家志望の大学生。湖山先生の弟子の中では一番若い。事故に遭い、今は絵筆を持つ右手の感覚をなくしている。

彼――斉藤湖栖。湖山先生の弟子のひとり。完璧な画技を持つ絵師なのだが、今は、利き手ではない左手で描いている。

湖山先生――篠田湖山。日本を代表する水墨画家。多くの弟子がいる。

千瑛ちあき――篠田千瑛。湖山先生の孫。二年前の公募展で、最高位の「湖山賞」を最

年少で受賞した。

湖峰先生――西濱湖峰。湖山先生の弟子の中では一番の実力者。

空は晴れ、朝よりも暖かった。湖畔を半周したあたりで、脇に逸れ、山を登り始めた。山道に慣れるころ、彼は口を開いた。

「あなたと出会い、千瑛さんの指導をしていたとき、①私も湖山先生に、一度水墨から離れ、筆を置くように、言われていました。私は、先生がおっしゃられていることを理解できなくて、戸惑っていました。ある段階に來れば、必ず起こることですが、弟子は師と自分を試すために小さな反発を始めます。それは弟子の成長でもあり、師の器量の試される機会にもなるのです。私の場合、湖山賞を獲り、雅号しやごうを頂いた後からそれが訪れたようです。

湖峰先生や湖山先生の湖の号を名乗っても、私は彼らには遠く及びませんでした。私はただ、緻密に描けるだけ。彼らは天地を自在に生み出せるのです」

彼の言う通り、湖山先生や西濱さんの画技は根本的に何かが異なっている。それを画技と言うべきか 躊躇ためらわれるほど、強烈な印象を与えられる。湖山先生に至っては、目の前で描かれても 凄さすごそのものの理由がよく分からない。魅力という言葉が一番近いけれど、それでもうまく言い当てられない。

彼は立ち止まり、道にあった石を足で除けると、また進み始めた。彼は道そのものを、登りながら直していた。

「少しでも多く訓練し、細かくものを見て、前に進みたい。より高い画技を身に付け、より良い絵を描きたい。その先に、湖山先生や湖峰先生がいると信じていました。またその姿を見せて、千瑛さんを厳しく鍛えました」

そうだった。彼は徹底して、画技の失敗を指摘し、完成度の高い絵を描くように彼女に強いていた。彼女はそれに従い、年若くして達人に引けをとらない技巧の絵師になった。

「それは、間違いないのでしょうか。千瑛さんは、斉藤さんの指導によって湖山賞を獲得する絵師になりました」

彼は首を振った。

「いいえ、違います。彼女が湖山賞を獲得に値する絵師になったのは、あなたに出会ったからです。技術ではなく、心でものを見、世界や水墨の持ってい

る素直な美しさと人生を重ねることができる姿勢……。それを学ぶことによつてはじめて、修得し 研鑽けんさんしてきた画技を生かすことができたのです。どんなに素晴らしい技術があっても、それを生かす心がなければ意味がない。器そのものが大切なわけではない。器に何を注ぐかが大切なことなのです」

「器に何を注ぐか……」

「そうです。技は 所詮しよせん、器に過ぎません。私は器を磨き続けていただけでした。完璧なものに用はない、そう言われました」

僕の足が止まった。

「僕も同じことを湖山先生に言われました」彼が振り向いて、僕を見下ろした。彼は大きな岩に足をかけていた。道は途切れていた。

「あなたもですか。私は、先生に言われたその言葉をことあるごとに思い返していました。完璧とは何か、用とは何か。なぜ、完璧はいけないのか。用いとは、何を何に用いるのか。私にはずっと分かりませんでした」

彼は右手を差し出した。僕は左手を出し、彼が握ると岩場まで引き上げられた。強く乾いた手だった。僕らの息は弾んでいる。距離はないが、角度が高い。ほんの少し目が合うと、彼はまた上を目指して前を進んだ。

「夢の中にまでその言葉が出てきて、描くことが怖くなり、描きすぎる自分の絵に嫌悪感さえ覚えるようになりました。二人の師ともいえる人たちへの嫉妬から、心を開いて話をすることも難しくなりました。私は湖山会で孤独を感じていたのです。そして、ついに会派を離れました。私は湖山会で最

も劣った絵師だと、自分のことを考えるようになりました」

僕は彼の告白に驚き、言葉を失っていた。

彼はなんでもないのでのように語り続けていた。

「湖山会を離れた後は、世界を見て回りました。ヨーロッパに渡り、美術館を巡り、景勝地を巡り、さまざまな人に会い、これまで目にしたことのない現実の中で、描くことを忘れるために歩き続けました。けれども、進めば進むほど、焦りを感じ始めました。当たり前のことです。探すべき場所を最初から間違っているのですから。海外旅行を繰り返して、世界を見て旅をしても、大切なものに自分から目を逸らし続けていれば、②最も重要な場所にはたどり着けないのです。あなたも、湖峰先生も、湖山先生も、誰も世界を旅して絵を描いたわけではない。外の世界を探したわけではない。むしろ、反対の場所を探したからこそ、たどり着くことができた」

僕は自分の中にあるガラス張りの白い部屋を思い浮かべた。

それはたどり着いた場所ではなく、いつの間にか放り込まれていた現実だった。もしくは、僕が逃げ込んだ場所だった。

「そんなあなたが、私と同じような状況に入りつつあることを、あの揮毫きごう会の放送を見て思いました。私とは追求する方向は違いますが、筆を置く時期だと思いました。不思議なもので、自分自身ではわからないのに、他人の同じような状況は容易く見てとれます。どんな言葉も、誰からの言葉もきつと届かないだろうから、言葉は何一つ書かずに手紙を書きました」

③僕は彼からの手紙を思い返していた。

彼の名が記されていない二枚のハガキ。

二つとも湖に栖すむということが描かれていた。そして、湖に生きているということかとも思った。それだけではなかったということか。

一枚目の小枝にとまる 嘴くちばしを羽毛にうずめた鳥の絵、二枚目の湖と山、そして湖面に浮かべた小さな舟の絵。どちらも湖に休んでいた絵だった。僕はあの絵を見たとき、目が吸い込まれた。何かをほんの少し忘れることができた。

「頂いたハガキを見たとき、すぐに意味は分からなかったけれど、気持ちが少しだけ軽くなったことを覚えています。自分の問題から少しだけ視線を逸らせたことを……」

「絵とは、本来そういうものだと思います。ほんの少し視線を引き、心を傾ければ、深く大きく答えてくれる。そして、それは時に言葉よりも大きく強く心に届く」

「そうか、それが……」

「そうです。それが『用』です。絵の用だと思えます。心を傾ける隙間が絵には必要なのだと、ここに来て思い至りました。少なくとも水墨画はそうです。まさに、『完璧なものに用はない』のです。あなたにはそもそも見えていたはずの世界です。……目的の場所に着きました」

登り道は終わり、開けた場所に来た。そこは綺麗に木が刈られ、湖と建物を一望することができた。上から望む湖は、わずかに瓢箪ひょうたんのような形をしている。

開けた空間の真ん中ほどに、子どもの背丈ほどの塚がある。誰かの墓だろうか。

彼は、足元に生えていた花を手に取り、その石の前に供えた。屈んだまま素早く手を合わせると、すぐに立ち上がった。

「誰かのお墓なのですか」

「いいえ。この墓は、誰か、ではなく、何かの墓です」

「何か？」

「これは筆塚です」

「筆塚って筆を供養しているのですか」

「そうです。湖山先生が建てられました。これまで使ってきた筆、その役目を終えた筆を葬り供養していると聞きました。私も、湖山先生と湖峰先生にそれを伺ったときは奇妙な習わしに聞こえましたが、これは習わしとい

うよりも湖山先生がご自身の気持ちから始められたものらしいです。『禽獣草木すべての命を借り、命を以って、命を描くのが絵師だ。だからそ

の役目を果たしてくれた筆の命を大切に葬り、還すことを忘れないように』

とのことでした。お寺の方を呼んで供養されることもあります。私や湖峰

先生の筆もここに眠っています。私は湖山先生に言われるまで、筆が生き物

でできているなんて思いもしませんでした。よく考えれば、文房四宝すべて

が自然から力を借りてできています。それらを作る職人の方々も命をつか

い人生を傾け、道具に命を吹き込みます。無下にできないと思うのは、当

然かもしれません。先生らしいなとも思いました。さあ、どうぞ」

僕は彼に促されて、手に持っていた筆巻を開いた。中から④壊れた筆を取り出した。

「塚の前にある石の台に置いて下さい。お焚き上げは今度まとめて行います」

僕は言われるまま、筆を置いた。指先から筆が離れたとき、手が少し軽くなった。同じだけ、寂しさがやってきた。僕の一部が指先から離れた。

そして、自然と手を合わせた。人ではない物に手を合わせるのは初めてのことだった。だが、先生の気持ちもよく分かった。千瑛の手でこの筆が終わりを迎えたとき、誰かを失ったような気持ちになった。それは自分の身体

の一部を失った悲しみと言うよりは、誰かとその間の何かを失ったような感覚だ。

それを表す言葉はないけれど、哀しみだけは本当のことだった。

あれが道具の命だったのだろうか。

執着とも妄想とも言いがたい、何かに向ける気持ちがあつた。筆が常に僕を助けてくれたことを知っていた。僕はこの筆が死んだとき、どこかで終わりを感じ始めていたのかもしれない。

祈りを終え、立ち上がると風が吹いてきた。墓地と同じ静けさがそこにあると感じるのは、何かが眠っていると信じているからだろうか。

斉藤さんは僕の隣に立った。

「ここにきて、たった一人で生きて過ごしてみて、いろんなことに気づきました。自分が画業にかまけている間に、見逃していた幾つものことが今さら

ながら分かってきます。幾つもの命の営みが重なり合って、命がようやく育まれる。何か一つが切り離されてそこにあるわけではなく、切り離された現実なんて本当は存在しないということです。この谷間にある湖を眺めて、空の映し出された湖面を見ると、命は、命と命の間にしか生まれないのだなと分かりました。当たり前の愚かな感想です。でも、それに気づくまでに、世界中を旅しなければなりませんでした」

⑤彼は微笑^{ほほえ}んでいた。瞳には湖が映っている。

「切り離されて、切り離して、はじめて繋^{つな}がっていたことに気づくなんて、皮肉なものです。でもそれに気づいたときから、私は左で描き始めました。いつかまた、自分の右手で心のままに描けるようになる日まで」

彼は野球帽を脱いで、空を見上げた。彼の横顔を眺めながら、湖山先生が彼の何に期待していたのか分かるような気がしていた。優れた画技や天才的なセンスではない。彼の澄んだ心の在り方を、湖栖と言ったのだ。この清らかな水辺に住むように、汚れない心と想いを持っていた。

「素直にものを見るというのは大変なことですね」

と彼は呟^{つぶや}いた。

「それでも、素直な目を持ったとき、自由というのは、とても素敵なものですよ」

彼は微笑み、僕に会釈して歩き出した。しばらく佇んでいると、鳥が一羽、筆塚の上に留まり、すぐに飛び去った。

何かを描くのなら、今しかないのだと思えた。

空も動き始めた。

とがみ
(砥上 裕将「一線の湖」より)

*1 雅号……画家が本名以外につける風雅な名のこと。師から与えられることが多い。

*2 ガラス張りの白い部屋……両親を交通事故で失った十七歳の「僕」が、何もせずに家に閉じこもっていた時の心の状態を表す比喩表現。その時、「僕」はこの世界を無機質で空虚な透明すぎるものと感じていた。

*3 あの揮毫会の放送……湖山先生一門が行ったテレビの公開番組。この時、「僕」は大役を任されたのに失敗してしまい、そのため、湖山先生一門の評判を落とすことになった。

*4 文房四宝……筆・墨・硯・紙のこと。

問一 傍線①「私も湖山先生に、一度水墨から離れ、筆を置くように、言われていました」とあるが、それはなぜか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分の技量は師から与えられた雅号にふさわしくないと考え、持ち味である緻密さを捨てようとしていたから。

イ 雅号を与えられたことで師の技を盗んだと勘違いし、これからも師の真似をすることが大切だと感じていたから。

ウ より高い画技を訓練して身につけることで、水墨画を完成度の高い緻密なものにするべきだと考えていたから。

工 賞を獲得水墨画を描けたからと言って、師の絵の持つ魅力ともいえるものに近づくのは無理なことだったから。

問二 傍線②「最も重要な場所」という比喩表現は、どのようなことを表しているか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。
ア 優秀な師への嫉妬から湖山会を離れて別の師を探すという行動が大切なのではなく、師の恩に報いるために、自分の画技を磨いていこうとする心構えこそ大切なのだということ。

イ 世界の美しさに直接触れて自分の感性を磨くことが大切なのではなく、自分の心の中に広がる思いや感覚に素直に従い、それを描こうとする姿勢こそ大切なのだということ。

ウ 水墨画の修業を続けて器に注ぐべき完璧な画題を見つけることが大切なのではなく、絵として描くに足りる重要なものを、選択する感性を身につけることこそ大切なのだということ。

エ 世界の景勝地を巡って心に響く対象に出会う行動力が大切なのではなく、状況が変わっても新しいものを求め続けていく、絵師としての意思の強さこそ大切なのだということ。

問三 傍線③「僕は彼からの手紙を思い返していた」とあるが、この「手紙」は「僕」にどのようなことを伝えるものだったのか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 水墨画というのは、すべてを緻密に描くことよりも、見る者に心を寄

せる余地を作り、その心に直接語りかけるから素晴らしいのだ。

イ 水墨画の世界で重要なのは、自分の放り込まれている現実を見つめて、その一つ一つの景物を丹念に描いていくことなのだ。

ウ 水墨画とは、画面の中に何を描かなければならないのかを十分に考えて、取り組まなければならないのだ。

エ 水墨画という世界で重要なのは、見る者の心をいかにつかむかを考えるから、描きはじめるということなのだ。

問四 傍線④「壊れた筆」とあるが、「筆」が壊れたことで、「僕」はどのようなことを感じたのか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア いつも側にあった筆が明日から「僕」を助けてはくれないのだと悟り、哀しみが心の中に広がるとともに、「僕」自身の命もこのまま尽きてしまおうと虚しく感じた。

イ 命を吹き込まれた筆はその恐ろしいまでの生命力で「僕」の絵を支えてくれたのだが、筆に操られる日々にも疲れてもいたので、気持ちが少し楽になったと感じた。

ウ 命を吹き込む職人の手で作られた筆が「僕」の絵に躍動感を与えてくれていたことに気づき、長年修業を積んだ職人の技に心の底から尊敬の念を抱いた。

エ 自然の命を受け継ぎ新たな命が吹き込まれた筆は、体の一部となり

「僕」を助けてくれたので、大切な人を失い繋がりが断たれたような寂しきを感じた。

問五 傍線⑤「彼は微笑んでいた。瞳には湖が映っている」とあるが、ここにはどのような表現効果があるか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 水墨画の画技を極めていくと、自然の景物を自由に組み替える作業が容易になり、自らの手で新しい自然の姿を創り出せる喜びが朗らかに表現されている。

イ これまで描いてきた水墨画はいつも師の影響下にあり、すべてが師との繋がりの強さを物語っており、一人では何もできない現実に気づいたことが暗示的に表されている。

ウ 一人きりで大自然と向き合い、その美しさを十分に味わう経験を踏まえて、改めて水墨画に必要な心の自由を手にした自信が得意げに表現されている。

エ 水墨画は、描く道具や人、描かれる対象、鑑賞する人などいくつもの命の営みが重なり、繋がりがあって生まれることを受けとめる素直さが象徴的に表されている。

四 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

名前という「呪」^{しゅ}

ここで少し、『千と千尋の神隠し』^{*1}という、タイトルにもついている名前に関わる問題を考えてみましょう。

トンネルの向こう側の世界に迷い込んでしまった千尋は、「千尋」という本名を奪われ「千」という名前を与えられます。八百万の神たちを癒す^{やおよす}湯治場「油屋」の女主人である湯婆婆^{ゆばあば}は、本名を奪って新たに名前を与えることによって人を支配しているのです。湯婆婆に名前を奪われると、その人は自分自身のことを忘れてしまいます。つまり自己意識がなくなるのです。^{*2}ハクも、湯婆婆に本名を奪われて自分の名前が思い出せなくなっているために、この世界から出ていくことができません。『千と千尋の神隠し』に限らず、ファンタジー作品では、①名前を取り戻すとか名前を与えられるということに、大きな意味があることが多いですよね。

「名前」というのは、この世で一番短い「呪」である^{*}。これは、岡野玲子さんという漫画家が描いている『陰陽師』（原作・夢枕獏）のなかに出てくる言葉です。「呪」というのは、呪文という意味です。この『陰陽師』のなかでの説明によると、「名づける」という行為は、そのもののありようを規定したり、縛つ

たりするという意味を持ちます。だからこそ親は子どもに、幸せな人生を

送ってほしいという願いと希望を込めて、いい呪文としての名前を必死で考えるのです。(そのため、子どもの命名にまつわって、家族のなかであの名前がいいこの名前がよかったなどというトラブルが起こると、想像以上に大きな苦しみを生むことがあります)。「千と千尋」というタイトルにもあるように、この作品は名前を奪うことによって人をコントロールするという、名前の「呪」がひとつのテーマになっているんです。

たとえば「誰々ちゃんのお母さん」「誰それさんの奥さん」という「呪」は、よくかけられている「呪」ですよ。みなさんのお母さんがそのように呼ばれているのを耳にしたこともあるでしょう。この「呪」をかけられることで、「お母さん」「奥さん」といったその役割をやりこなす自分に喜びを覚えることがあるのも確かです。しかしその一方で、本名で呼ばれることがまったくない日々が続くと、自分自身を見失うような気持ちに襲われることもあります。自分が100パーセント「お母さん」になってしまうと、子どもと自分との境目がわからなくなるのです。そうすると、子どもの成績が悪いのは、まるで自分が悪いと言われているように感じたり、とにかく子どもの失敗は自分の失敗としてしか捉えられなくなって非常に苦しむ人も出てきます。そんなふうに感じる親も苦しいでしょうが、ちょっとした失敗でも信じられないくらい怒られたり、不機嫌になられたりすると、子どもとしては、なんでそんなに……? でも、きっと自分がダメなんだと混乱することもあります。これはとてもゆがんだ形で、苦しい一体感だと言えるでしょう。

(中略)

また、中・高校生ともなると、特に男子は、親を「オヤジ」「お袋」と呼ぶようになりますよね。小さい頃から「お母さん」とか「お父さん」、「おとん」「おかん」などと呼んでいたら、そのままの呼び名でいける場合もあります。でも今まで「パパ」とか「ママ」とか呼んでいたのに、そのまま呼び続けるのはなんだか恥ずかしいし、なんか違うという感覚になることってあるものです。それで関係性を示す「父」や「母」が介在する呼び名をできるだけ避けようとして、「ねえ」「ちよつと」「あんた」とか、どうかすると「ばばあ」「じい」などと言いだすこともあります。

思春期になると、子ども時代と同じ距離で親とつきあうのが難しくなるので、呼び名もそれにつれて変わることがあるのです。つまり呼び名の変化というのは、関係の変化を示していると言えるでしょう。

親はブタではない

千尋は、この油屋の世界で、オクサレサマをもとの高貴な姿に戻し、淋しいカオナシに居場所を与え、湯婆婆にコントロールされているが故に命の危機に瀕したハクも救うなど、それまでの千尋からは考えられないくらいのパワーを発揮します。

さあ、そして物語はクライマックスを迎えます。すべての作業をやり終えて湯婆婆のもとへ帰ったとき、湯婆婆は「このなかからおまえのお父さんと

お母さんを見つけないとたくさんのブタを千尋に見せます。②千尋はじつとブタを眺めたあとで、「おばあちゃん、だめ。ここにはお父さんもお母さんもないもん」ときっぱり答えるのです。

千尋の答えの内容もすごいですが、その前に、もうひとつ驚くところがありますよね。③千尋はいきなり湯婆婆を「おばあちゃん」と呼びます。湯婆婆も「おばあちゃん?!」とびっくりしていました。「おばあちゃん」というのは「湯婆婆」という支配的な魔女の名ではなく、親しみを込めた関係性を表す呼び名です。また後の章で湯婆婆と銭婆せんばの関係について詳しく説明しますが、湯婆婆と同じ姿の銭婆と沼の底の家で温かい関係を構築し、受け入れられる体験をした千尋にとって、もう湯婆婆は恐ろしい魔女ではなくなっているのです。関係性によって呼び名が変わると同時に、相手をどう呼ぶかで、関係性も変わってくるのです。「おばあちゃん」と呼ばれて、湯婆婆も一瞬、ひるみますよね。

さて、このブタのなかのどれが両親かと問われて、このなかにはいないと答えるのには、相当な判別力と自信が必要です。それなのに千尋は毅然きぜんと断言します。十二匹ものブタを見せられて、そのなかから両親を探して当てるという湯婆婆の問いの前提からして覆っているのです。すごいですよね。問いの前提さえ平気で覆せるのは、千尋が湯婆婆のコントロール下に置かれて主体性を奪われている「千」という名前の呪から、完全に自由になっているからでしょう。

この問いに千尋が答えたのは、銭婆のところからハクと一緒に湯婆婆のも

とに帰ってきてからです。帰ってくる途中で、竜の姿をしていたハクのウロコがパリン！という音とともに剥はがれ落ち、ハクは自分の本名を思い出します。そしてそれと同時に、川でおぼれかけたことがあるという千尋の幼い頃の記憶も甦よみがえってきました。ハクの呪縛がとけた瞬間に、千尋も過去の自分と今の自分がしっかりとつながったのです。ハクは千尋にとって、過去の記憶のメモリーバンクのような役割をしていた部分もあるのかもしれませんが。ハクのウロコがパリン！と剥がれ落ちる瞬間に、千尋もまるで目を覚ますかのように、ハツと自分は自分なんだという自己感覚に覚醒したようにも思えました。

そのようなプロセスを経てから出されたこの千尋の答えは、実に意味深いです。つまり、どのブタが親なのかと問われ、このブタのなかに親はいないと答えたということは、「親はブタではない」という結論を出したということですが、これは、親イメージがはつきりと変化したことを示しているように思います。これはただ、親をもとどおりに見るようになったというだけではありません。ブタに見えるくらいマイナス面もあることがよくわかったうえで、それも含めて親も人間なんだということを認める力がついたということではないでしょうか。

この『千と千尋の神隠し』のなかでは、親がブタになり、そしてもとの人間に戻るところまでが描かれています。実際は、親がブタに見えたり、また人間に見えたりという行き来を、思春期が終わるまでの間、子どもはすごい回数、繰り返すことが多いものです。一回、親がブタに見えて、おしまい。

ではなく、あ、まともな人間だ……としたり、またブタだよ……とガックリきて腹が立ったり……というのを、繰り返しながら大人になっていくんです。それは親と、ちゃんとした人間同士として仲良くつきあっていけるような大人になるためには、どうしても必要なプロセスなのです。

（岩宮恵子『好きなのはワケがある 宮崎アニメと思春期のころ』より。

なお、本文には省略等がある）

*1 『千と千尋の神隠し』……第52回ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した、

宮崎駿の代表的な長編アニメ映画。

*2 ハク……異界に迷い込んだ千尋を助けてくれた少年。白竜の姿になって、湯

婆婆の弟子として仕えている。

*3 オクサレサマ……もとは高貴な神だが、ごみとけがれによって悪臭を放つ泥

のかたまりのような姿となり、油屋に現れた。

*4 カオナシ……黒い影のような体にお面をつけたような姿で、「自分」を持たず、

他人の声を借りて会話をする。

問一 傍線①「名前を取り戻すとか名前を与えられるということに、大きな意味がある」とあるが、なぜか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 名前にはその人の人生を左右する力があるため、子どもにどのような

名前をつけるかで、その子の職業や寿命が決定することが、わかっているから。

イ 名前にはいい呪文としての役割や、自己意識を喪失させる力があるため、登場人物や物の名前を決めるときには特に慎重になるべきだと考えられるから。

ウ 名前には自分と他人との境目を、わからなくするような力があるため、自分の名前を奪われると自己意識がなくなり、相手と一体化してしまうから。

エ 名前にはそのもののありようを規定したり、縛ったりする力があるため、自己意識を確立したり、相手を支配したりすることができると考えられるから。

問二 傍線②「千尋はじつとブタを眺めたあとで、『おばあちゃん、だめ。こ

こにはお父さんもお母さんもないもん』ときっぱり答えるのです」とあるが、なぜ「きっぱり答える」ことができたのか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 千尋が湯婆婆のコントロールから完全に自由になり、自己感覚に覚醒し、親イメージがはつきりとして、親のマイナス面も含めて認められるようになったから。

イ 油屋の世界でさまざまな困難を乗り越えたことで、問いの前提を覆すほどの判断力と自信を身につけ、親と人間同士のつきあいができるほど

大人になったから。

ウ ハクが千尋の記憶のメモリーバンクの役割となっていたが、その役割を終えたことで、千尋のものの見方が変化して本来の姿がはつきりと見えるようになったから。

エ 子どもは、親のマイナス面を嫌悪したり、受け入れたりするのを繰り返して大人になるが、このときの千尋はちょうど、両親のマイナス面を受け入れることに覚醒したときだったから。

問三 傍線③「千尋はいきなり湯婆婆を『おばあちゃん』と呼びます」とあるが、「おばあちゃん」と呼ぶということはどのようなことを示しているか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 湯婆婆を「おばあちゃん」と呼んだということは、千尋がさまざまな経験を通して自分の成長を自覚し、老人である湯婆婆を守るべきであるという現実を認め始めたということ。

イ 湯婆婆を「おばあちゃん」と呼んだということは、千尋にとって湯婆婆がこれまでのおそろしく支配的で遠い存在から、親しみのある身近な存在へと変化したということ。

ウ 湯婆婆を「おばあちゃん」と呼んだということは、千尋が周囲の人と、これまでの距離感でつきあっていたのが難しい思春期にさしかかったということ。

エ 湯婆婆を「おばあちゃん」と呼んだということは、千尋が自分を受け入

れてくれる存在と出会い、湯婆婆との関係性を変えていこうと意識し始めたということ。

問四 この文章における表現の特徴として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 有名なアニメの場面や、身近な出来事などを具体例として取り上げ、筆者の意見をわかりやすく説明している。

イ 隠喩や擬人法などを多用することで、説明に具体的なイメージを与えている。

ウ 話し言葉を使ったり、会話文を多く用いたりして、親しみやすい印象を与えている。

エ 各段落の最初にその段落のまとめが書かれており、論理的な構成となっている。

問五 国語の授業でこの文章を読んだ後、「名前という『呪』』というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄や、や。や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

〔五〕百人一首九十三番 鎌倉右大臣（源実朝）の歌の現代語訳〔A〕、新訳

〔B〕、鑑賞文を読んで、あとの各問に答えよ。

世の中は常にもがもな渚漕ぐ①あまの小舟の綱手かなしも

をぶね

（九十三番 鎌倉右大臣 出典『新勅撰集』 羈旅（きりよ））

〔A〕

世の中は

常に変わらず

平安であつてほしいものだよ

波打ち際を漕ぐ 漁夫の小舟の

綱手をひくさまがここからみえる

その動きが

今日はことのほか、こころにしみる

〔B〕

世の中は

いつも変わらずに

あつてほしいよ

波打ち際を

漁師がゆく

その手がひく

小舟の先の

綱の哀しき

私は子どもの頃にこの歌を読んで、「常にもがもな」がわかりませんでした。これは難しいですけども、恐れることはありません。「常に」は「平常にいつも」という意味です。「もがも」は、「くだいいなあ、くであつたらなあ」と、実現が難しいことに対して願望をあらわす終助詞です。「な」は詠嘆の意味をくわえる終助詞です。

ですから、上の句「世の中は 常にもがもな」は、「常にいつもいつも世が平和であればいいなあ」という意味です。ずいぶん大きなことを言っていますね。世の中が平和でないからこのような歌を詠むのだと思います。

上の句から一転して、下の句では通常の日常生活が詠われます。「渚漕ぐ あまの小舟の綱手かなしも」。「あま」を私たちはつい海女と考えますが、漁師や漁夫のことです。波打ち際で小舟を漕ぐ漁師が、舳先にくくりつけた引き綱を岸のほうに引っ張っている様子です。大きな願いから一転して、写実的な風景ですね。そんな漁師たちの動きが、今日はことのほか、心に染みて哀しい。そんな歌だと思います。

「かなしも」はすごく複雑な心情です。哀しさだけでなく、おもしろさ、興味深さ、興味のあることを読み込む方もいらつしやいます。私としましては、哀しいという感傷とともに、人間のいとなみに対する愛おしさを読みみたいで

す。それで新訳を書いてみました。

この哀しさは誰のものでしょうか。綱手が哀しがっているわけでもないし、漁師が哀しがっているわけでもない。哀しいと思っているのは、詠み手である実朝でしょう。漁師たちが毎日仕事をしている姿が、世の中は常に変わらず平和であってほしいという願いに響いてきます。実朝は鎌倉幕府の三代將軍として常に生死の極みに在りました。最後は暗殺されましたね。そういう運命にあった人の抱いた感慨ということです。

②きつぱりと二句切れの歌です。句切れは、意味の切れ目です。切れたあとには、沈黙や空白が入っています。この沈黙を意識すると、平面的だった歌が俄然、立体的になってきます。言葉を動かしているのは沈黙です。沈黙が艇子ていこになって言葉を動かし、人の想像力を弾ませてくれるのです。

句切れの沈黙のところで、息を途切らせて読んでみましょう。「世の中は常にもがもな」でひと息つく。するとそのあと、実朝の視線がはるか沖まで伸びていく感じがしませんか。そして「渚漕ぐ あまの小舟の 綱手かなしも」で、視線が近景に戻る。漁師が綱手を引く姿が見える。実朝はおそらく日常的に、いろいろな思いを込めて、はるか鎌倉の海を眺めていたのだと思います。

実朝は、鎌倉幕府をつくった源頼朝と北条政子の次男に生まれました。頼朝が突然死した後、お兄さんの頼家が征夷大將軍の地位に就きましたが、のちに修善寺に追放されます。代わって実朝が十二歳にして後を継ぐのですが、政治をつかさどっていたのは北条氏です。実朝には、自分が形ばかり

の將軍の地位に置かれているような思いがあったことでしょう。京都の朝廷には後鳥羽上皇がいて、華やかに歌壇を率いていた。その後鳥羽上皇に、実朝は忠心の心も持っていました。幕府と朝廷のあいだ、政治と文学のあいだに在った。難しい曖昧なポジションを生きた人の孤独が透けて見えてくるようです。東国から一度も出ずに、その後、二十八歳の若さで甥の公暁くぎょうに暗殺されてしまいました。

③でも実朝は歌の名手でした。藤原定家に師事しましたが、定家がいた京都に行ったことはなかったそうですから、ずっと手紙などでやりとりしたのでしょう。定家に歌を見てもらいながら、『万葉集』や出来たばかりの『古今集』を読み、大変熱心に勉強したようです。勉強の成果でもあるのでしようが、実朝には、古いにしえの和歌を本歌取りした歌も多いのです。この歌も、『万葉集』の「河の上のゆつ岩群いはむらに草生むさず常にもがもな常処女とこをとめにて」ふきのとじ吹黄刀ふきのとじ自こから取られていると言われていますが、比べて読んでみまうとどうでしょうか。まったく実朝自身の歌になっていますね。本歌取りといっても、すつきり軽々と、本歌を乗り越えているのです。実朝は本当に歌の才能があったと思います。平安貴族たちの歌とは、だいぶ違う、びっくりするような素直な歌がある。そして、多くの歌に哀しみがにじんでいます。

源実朝については、いろいろな人が書いてます。吉本隆明『源実朝』、太宰治『右大臣実朝』、小林秀雄『実朝』、中野孝次『実朝考——ホモ・レリギオーズホモ・レリギオーの文学』など。皆さん、実朝に惹かれていたのでしょう。古くは斎藤茂吉、正岡子規も、『金槐和歌集』を賞賛しました。最近では、中村稔さんが

書き下ろしで実朝の和歌について書いています(『読書の愉しみ』所収の「源実朝『金槐和歌集』」)。従来の実朝論に異を唱えた一文で目が覚めます。すぐれた叙景詩人だが、それ以上の天才ではないというのが中村稔氏の結論です。

しかし私はやはり実朝に肩入れしてしまうのです。明日には命を落とすかもしれないという、危機感迫る日々のなかで、実に透明な孤独な歌を詠みました。ついに政治家にはなりきれなかった、詩人としての実朝の哀しみが見えてきます。④そんなことを思いますと、実朝のまなざしが私の心の中にまっすぐ入ってきて、私も実朝と同じ気持ちで鎌倉の海を眺めたくなるのです。

(小池昌代「百人一首 現代に生きる和歌」より)

*1 本歌取りした歌……有名な古歌の言葉を取り入れてつくった自作の歌。

*2 金槐和歌集……源実朝がへんさん編纂した歌集。

問一 傍線①「あまの小舟の綱手かなしも」についてあとの各問に答えよ。

(1) 「かなしも」の現代語訳にあたる言葉を[A]の現代語訳から抜き出せ。

(2) 筆者が新訳[B]を書き加えたのはなぜか。次の空欄に入る言葉を、解

答欄に合うように、鑑賞文から十五字で抜き出せ。

[A]では伝えきれなかった「十五字」を伝えたいから。

問二 傍線②「きっぱりと二句切れの歌です」とあるが、これによってどんな効果をもたらされるか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 意味の切れ目を入れることで、沖を見つめる実朝の視線から、漁師が綱手を引く姿へと戻ってゆく。

イ 意味の切れ目を入れることで、漁師たちとは対照的な、運命に翻弄される実朝の姿が浮かび上がってくる。

ウ 意味の切れ目によって、平和を願いながらも、暗殺されてしまった実朝の無念さが強調される。

エ 意味の切れ目によって、漁師が綱手を引く姿と、実朝の揺れ動く心とを重ね合わせることができると。

問三 傍線③「でも実朝は歌の名手でした」とあるが、こう言えるのはなぜか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 古の和歌に対する知識がなかったものの、歌の才能に恵まれた実朝は、心情を吐露したたくさん歌を詠んだから。

イ 「万葉集」や「新古今和歌集」と比べても、遜色のない技巧を凝らしたすばらしい歌を詠んだから。

ウ 「万葉集」や「新古今和歌集」を熱心に勉強したのにもかかわらず、ほとんどの歌はその亜流になってしまったから。

エ 政治と文学の間にあつて葛藤しながらも、古の和歌を熱心に学んだ

結果、本歌を越えた実朝自身の歌を詠んだから。

問四 傍線④「そんなことを思いますとく私も実朝と同じ気持ちで鎌倉の海を眺めたくなるのです」とあるが、この内容の説明として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 危機迫る日々にあっても平常心を失わずに、歌を作り続けた実朝に
対して、尊敬の念を抱いている。

イ 常に難しい曖昧なポジションにあった実朝の、孤独な心が投影された
歌に共鳴している。

ウ 世の中の平和を願いながら、公暁に暗殺された実朝から人生の悲哀
を感じ取っている。

エ 政治家になることができなかった悲しみを、歌に託した実朝の境遇と
自分自身とを重ねている。

